

明治期に金管楽器を製造していた人々について

『楽器商報』『ミュージックトレード』の記事、および内国勸業博覧会記録等の分析を通して

奥中 康人

文化政策学部 芸術文化学科

日本における西洋楽器製造の歴史は、オルガンやピアノ、ヴァイオリンの製造史に偏りがちで、金管楽器製造については、あまり調査されてこなかった。少し有名な江川仙太郎でさえ不正確な情報が多い。そこで、本稿は、明治期に金管楽器を製造していた職工について、雑誌記事や博覧会の記録に基づき、整理することを目的としている。

草創期における代表的な製造業者は、大阪では江名常三郎と上野為吉、東京では宮本勝三郎、江川仙太郎、田邊鐘太郎である。かれらの多くは、楽器の修理と信号ラッパの製造からスタートし、やがて「ホルネット」やバリトンのような金管楽器を製造することになった。

0. はじめに

日本における西洋楽器の製造について何か調べものをするとき、檜山陸郎の『楽器業界』（一九七七）や『楽器産業』（一九九〇）は非常に便利な書籍である。しかし、後者の奥付にはサブタイトルに「音楽・楽器ビジネス早わかり読本」とあることから判るように、研究書としてのクオリティを求めることは難しい。

たとえば、檜山は日本においてラッパ (bugle) が国内で製造されるようになった年を、明治十七年（一八八四）としており、多くの研究がこれに素直に従っていた。ところが、これは石井研堂の『明治事物起源』（正確に言うと、石井が参照した『いろは新聞』の記事）をそのまま引用してしまったことによる勘違いである。これについては、すでに筆者が、遅くとも明治四年には陸軍でラッパが試作され、明治五年には国産の英式・仏式ラッパが製造されていた事実を確認している¹。

さらに檜山は、国産ラッパ製造の明治十七年説に続き、ラッパ以外の国産金管楽器製造の始まりについて、次のように述べる。

江川仙太郎と柳沢徳太郎（孝信の父）が、管楽器工場「江川製作所」を作ったのが明治二十七年（一八九四）である。江川製作所は、宮内省雅楽部、陸軍軍楽隊、曲馬団やチンドン屋の管楽器の修理が主な仕事であったが、そのすべては舶来のものであった。しかし、修

理のかたわら製作を志して、明治四十年（一九〇七）三月開催された東京勸業博覧会に試作品のヘリコンバス、小バス、バリトン、アルト、ホルネット、トロンボーンなどの金管楽器を出品した。²

「江川製作所」（江川楽器製作所）は明治二十七年に設立され、「舶来」楽器を修理していたが、「修理のかたわら製作を志し」、明治四十年には「東京勸業博覧会」に出品できるほどになったという。しかし、これでは「ホルネット」のような金管楽器の国産を始めたのが、江川であったかのような誤解を招いてしまう。「音楽・楽器ビジネス早わかり読本」なので、枝葉末節は省略せざるを得なかったのかもしれないが、実際は、江川以前に金管楽器が製造されていた。

そこで本稿は、檜山が省いた枝葉末節を補い、明治初年の陸軍工廠におけるラッパ製造以降、民間において金管楽器を製造していた人々の実績を可能な限り掘りあげ、叙述することを目的とする。その際、重要な情報源となるのは、『楽器商報』や『ミュージックトレード』という楽器製造業・販売業の業界誌に掲載されていた記事や、明治期の内国勸業博覧会等の資料である。前者は、過去の楽器製造業界を回顧する記事が多く掲載されているものの、一般の目には届きにくい業界誌で、所載する図書館も極端に少ないため（国立国会図書館には所蔵）、これまであまり知られていない。ただし、記事によっては不正確な情報も含まれている

ので、個々の情報を批判的に精査する必要がある。後者は、たとえば博覧会の出品目録や審査評から、楽器が製造された事実を端的に確認できる。金管楽器製造は、明治四〇五年頃には陸軍工廠でラッパ製造から民間のラッパ製造へ、そしてラッパ以外の金管楽器製造へと展開してゆくが、媒介となった宮本勝之助と江名常三郎というラッパ職人を紹介することで前述の拙論は終わったので、少し重複するが、本稿は宮本勝之助から始めたい。

1. 宮本勝之助の宮本喇叭製作所

現在、東京都江戸川区に本社をおく宮本警報機株式会社の『ラッパ百年』（一九六九）に、次のような一節がある。

明治五年（一八七二年）かに、明治政府が陸軍を創設して、フランスやドイツから招いた指揮官によって、今までよりグット近代的西洋式軍隊に変わったので、明治八年（一八七五年）かに「造兵廠」（砲兵工廠条例により）と、名称も改まって外国式の信号用のラッパを造り始めたわけである。

それで、初代・勝之助が、たまたま銅壺屋であったところから（当時、すでに三十八歳、そのラッパ製作の主任の指導者から採用されることになったのが、ラッパ屋として生きることになる始まりとなっている。三

宮本警報機の創設者宮本勝之助は、陸軍の信号ラッパ製造にかかわった職人の一人であった。引用文の「ラッパ製作の主任の指導者から採用され」が、陸軍工廠（造兵廠）に雇用されて内部で働いたのか、あるいは納入業者として採用されたのかはわからないが、少なくとも陸軍と関係していたラッパ職人であったことは確認しておきたい。

宮本がラッパを製造していた事実は、他の資料によっても裏付けられることができる。たとえば、明治十年（一八七七）に上野公園で開催された第一回の内国勸業博覧会（第二区第十六類「教育ノ器具」）に二つのラッ

パを出品した記録が残っている。

喇叭（一）銅英吉利形 浅草北元町 宮本勝之助^四
（二）真鍮仏蘭西形

ここには浅草北元町の住所が記載されているので、当初は陸軍工廠で働いていたとしても、遅くとも明治十年には独立していたことを示している。

お雇い外国人のモース (E. S. Morse, 1838-1925) は、このラッパを見たらしく、

維新から、まだ僅かな年数しか経ていないので、博覧会を見て歩いた私は、日本人がつい先頃まで輸入していた品物を、製造しつつある進歩に驚いた。一つの建物には測量用品、大きな喇叭（…）^五

と、日本の「進歩」を示す展示品の一つとして国産の「大きな喇叭」（原文ではlarge trumpet）を挙げている。

ただ、『東京商人録』（一八八〇）という書物に掲載された広告を見ると、宮本が浅草でラッパを製造していたといっても、現代の私たちがイメージする楽器工場というよりは、筆頭はラッパであるものの金物なら何でも拵えてくれる銅壺屋である。

一喇叭馬車雷銅鉛鉛園引釜シミ込ラッパ製造外
ニ金銀銅鍍物品類御好御注文製作仕候也
製造人 東京府下浅草區淺草
北元町貳番地 宮本勝之助

勝之助は、『東京商人録』が刊行される前年（明治十二年）に、四十三歳で亡くなっているため、同書の本編には、「北元町」番地 宮本市五郎（二〇一頁）と、二代目として跡を継いだ市五郎の名前が記載されている。『ラッパ百年』によると、市五郎も明治二十二年に三十六歳という若さで亡くなってしまうが、その後、会社（宮本喇叭製作所）は信号ラッパではなく、自動車の警報機の製造に専念し、現在の宮本警報機株式会社へと発展していく。

ところで、二代目市五郎には弟子がいた。

その時分（明治二十二年に市五郎が亡くなった頃）弟子というか、徒弟というかが五、六人いたらしい（…）弟子たちは、それぞれに独立の気持ちを持っていた。その頃、一番年長者に江川、早川という人たちがあって、その江川という人は、独立して、日本管楽器の元祖になったのであった。^七

この「江川」は、もちろん江川仙太郎である。江川の独立が市五郎の没後なら、明治二十二年以降になる。

2. 江名常三郎の江名管楽器

江川仙太郎の話に移る前に、大阪のラッパ製造業者、江名常三郎について言及しておきたい。江名は、遅くとも明治十七年には信号ラッパを製造していたと思われるが、^八 檜山の著書にその名前は無い。

金管楽器製造史に強い関心をもっていた佐藤香津樹は^九、昭和三十五年に、かつて江名常三郎のもとで働いていたという杉本武三郎（明治八年生まれ）の自宅を訪れて、インタビューを試みた。杉本は明治二十三年（一八八〇）に江名管楽器に入っている。

私が江名管楽器に入社したときには、先輩として上野為吉さんがいました。上野さんは私より二つ年上で、私のあとから安田（保田）栄三郎が入ってきました。江名さんはその当時40才くらいでした。

和歌山県出身の方だそうで、上野さんと同郷だそうです。初めは樟脳製造の銅製パイプを製作していたとかですがその後師団軍楽隊の永井健（建）子楽長^{一〇}のお引き立てを得て楽器の修理を引き受けられ、引きつづいて信号ラッパを製作したのだそうです。これは舶来楽器を見本にして作ったものです（…）^{一一}

明治二十三年に「40才くらい」なら、江名は一八五〇年頃の生まれ。東京の宮本勝之助より若く、ラッパ作りも後発になるが^{一二}、やはり陸軍と関係を持ち、楽器修理だけでなくラッパを製造・納品していた^{一三}。ただし、宮本とは異なり、江名はラッパ以外の金管楽器の製造にも手を広げた。杉本は次のように語る。

私が入社した頃（明治二十三年）に、どこかの大きな博覧会へ出品したとか。バリトンの他にも楽器を出品したように聞いております。^{一四}

江名管楽器には、杉本の先輩として上野為吉が働いていたが、その息子、上野亀吉も、父親の為吉から聞いた話として、江名による博覧会への楽器出品について、

明治十八年に大阪において第なん回かの内国勸業博覧会が開催され、それに大阪の江名製管楽器バリトンが出品され銅牌の三等賞が授与されたということで、これは私の亡父為吉生存中に聞いた話でありまして亡父の親方に当る江名（名は不詳）氏が作ったもので国産第一号の管楽器であろうと存じます。^{一五}

と述べている。

杉本と上野の記憶は所々一致せず、怪しいところがあるが（たとえば、大阪で開催された内国勸業博覧会は、第五回で明治三十六年）、江名が明治二十三年の第三回内国勸業博覧会にラッパを出品し、受賞したことは『第三回内国勸業博覧会褒賞授与人名録』の「褒状」の欄に、

喇叭 同府〔大阪府〕西成郡難波村 江名常三郎^{二六}

と記載されていることから確認できる。大阪府内務部『第三回内国勸業博覧会事務報告書』（八十二頁）にも、第一部十五類（軍器及猟具）に江名が出品したラッパ二点が「褒状」を得たと記されているが、『第三回内国勸業博覧会出品目録』にはラッパ以外の楽器は見あたらないので、ここでバリトンを出品したという記憶は誤りのようだ。

ところで、『第三回内国勸業博覧会褒賞授与人名録』の別のページには、

喇叭 同府〔東京府〕浅草区永住町 白倉清吉^{二七}

とあり、東京浅草の白倉清吉という人物がラッパを出品し、「褒状」を受賞したことがわかる。白倉についての履歴はわからない（宮本勝之助・市五郎のところで修業した職人かもしれない）^{二八}。

褒状を受けた二人のラッパについて、『第三回内国勸業博覧会審査報告』（第一部）は、

東京府ノ喇叭八佳製ニシテ最モ成熟スル所アリ大坂府之ニ亞キ価値各低廉ナリ要スルニ此等ノ喇叭八軍用ヨリ寧ロ学校用ニ適スルモノトス^{二九}

と、どつやら同じ「褒状」でも、東京の白倉のほうがやや高く評価されており、どちらとも廉価なので学校用に適していると評された。

その五年後、明治二十八年（一八九五）に京都で開催された第四回内国勸業博覧会では、江名がラッパ以外の金管楽器を出品したこと（つまり製造したこと）を確認できる。

楽器コントルバース、全アルト、陸軍用喇叭、学校用全

摂津国西成郡難波村 江名常三郎^{三〇}

出品された楽器は四点、「コントルバース」（弦楽器のコントラバスではなく、サクソルン属の低音の金管楽器）と「アルト」、および二種類のラッパなので、杉本と上野が記憶していたバリトンはここにもないが、いずれにせよ、江名が遅くとも明治二十八年までに、ラッパ以外の金管楽器を製造していたことになる^{三一}。

しかも、江名が出品した「コントルバース」は、「喇叭」とともに褒状を受賞した。

コントルバース、喇叭 褒状

全〔大阪府西成郡〕難波村 江名常三郎^三

第三回内国勸業博覧会で「褒状」を得た白倉清吉は、この第四回の出品リストに名前は見あたらないので、白倉は出品しなかったようだ。だが、第四回内国勸業博覧会（開催期間は四〇七月末）が終了した後、『音楽雑誌』第五十四号（十月三十一日）に、なぜか五年も前の『第三回内国勸業博覧会褒状』を大きくアピールする一面広告を今更ながら出している^{三二}。同業のライバル、江名が「コントルバース」や「アルト」を出品したこと、そして「コントルバース」は「褒状」を受賞したことを知り、あわてて広告を出したように見える。この広告に記載されている白倉のラッパのラインナップは、「陸海軍用 消防用 学校用 運動会用 遊戯用」の五タイプ、最も高い三円三十銭から最も安い七十銭までの六段階の価格設定で、充実している。しかし、朝日新聞への広告掲載（明治二十九年三月二十七日）を最後に、白倉清吉（誠吉）の名前を見つけないことはできない。

おもしろいのは、白倉の広告が掲載された『音楽雑誌』の同じ号の「大阪通信」欄には、「彌々完全なる楽器製造人出でたり」という見出しで、次のような記事が掲載されている点である。

大阪南区陸軍用達喇叭製造所にて其主人江冬常吉なり氏は先きに或る吹奏楽器を製し「シカゴ」大博覧会へ出品したること有りしと云

ふも未だ其結果を聞かざりしが今回彌々「コントルバース」「ミベモール」(Mi-Bemoor Es管)を製造し陸軍々楽隊長を始め該楽吹奏家なる永田某氏に試験を請ひたりしに其結果頗る善く外部は素より音調に於て舶来品に少しも異なることなきとの好評を得たり氏の名譽と云ふべし而して氏は歩兵喇叭製造人にて陸軍の外関西地方九州地方に於ける諸学校の注文を受け居る為め常に職工数十人を使用して居りて大工場を有せり^{二四}

この時期に、大阪で「陸軍用達」のラッパを製造している「江冬常吉」は、江名常三郎と考えてよいだろう。「コントルバース」は、江名が第四回内国勸業博覧会に出品した楽器である。

しかし、この後、江名も楽器業界から姿を消している。明治二十八年は、日清戦争が終わった直後——楽器需要が低迷する時期——であったことにも留意しておきたい。

この第四回内国勸業博覧会には、もう一人、大阪からラッパを出品している人物がいた。江名の弟子の上野為吉である。

陸軍用喇叭
学校用全
摂津国西成郡難波村 上野為吉^{二五}

上野為吉の名前は『授賞人名録』にはないので、賞は逃したようだが、師の江名とともに評価はされている。

大阪府(江名常三郎外一名)ノ喇叭ハ其吹口ヲ白銅ニテ造ル吹奏者ニ対シテ衛生上甚タ可ナリトス但吹手ノ握ル所容易ニ錆ヲ生ス是レ蓋シ地金ノ粗悪ナル力為ナラン今後ハ宜ク其地金ヲ精選スヘシ且ツ軍隊用ト学校用ト其製ヲ異ニセルハ軍事教育上ニ於テ甚タ得策ニアラス単ニ軍隊用ノ一途ニ帰セシムルニ如カス^{二六}

審査を担当したのは、村岡範為馳、鳥居忱、古谷弘政、吉本光蔵とい

う、音楽界の錚々たる顔ぶれであった。

3. 上野為吉の上野管楽器

上野為吉については、子の亀吉が昭和三十五年(一九六〇)まで生きていたため、残された情報量は比較的多いが、あまり知られておらず、檜山の『楽器業界』にも、やはり名前は登場しない。

ここでは、佐藤香津樹の「喇叭太平記」の記述に基づいて上野の履歴を記しておく^{二七}。

上野為吉は明治六年和歌山生まれ^{二八}。大阪府難波村尋常小学校を卒業後、明治十七年(一八八四)に江名製作所に入った。かれの後輩には杉本武三郎、保田栄三郎がおり、信号ラッパを製造して陸軍に納入していたが、明治二十年代の不況によって、上野、杉本、保田は、江名製作所を出ることになった。上野為吉は東京に出て、「それまで取引のうえ知り合った」共益商社の白井練一の紹介で、「東京板橋の陸軍兵器廠に修理工として」働いたという。

この兵器廠では、奇しくもニッカンの創始者である江川仙太郎と、同輩としていっしょだったということです。上野為吉と江川仙太郎が、東西のラッパ屋として以前から知り合いだったのかどうか、このときが機縁でラッパ作りに後年身を入れるようになったのか、そのへんの事情はわかりませんが……。二九

佐藤は、先の上野亀吉へのインタビューをもとに、中井嘉造(明治十九年生まれ、上野管楽器から独立し、明治四十五年に中井楽器を創設)、上野都喜雄(為吉の孫)、上野勇吉(為吉の実弟)にも確認をとっている。上野為吉が江川仙太郎と同輩であったことについての信憑性は高い。上野為吉は、明治二十六年(一八九三)に大阪に再び戻る。

明治26年になりますと、日本と支那のあいだの雲行きが陰悪になってきました。このとき、大阪砲兵工廠の金属課長で秦(はた)とい

う人へ、軍命令として、

「ラッパを作っていた江名という男を探し出せ」という示達があったそうです。さっそく調査にかかりましたが、既に江名常三郎は故人になっておりましたので、秦課長はその旨報告いたします。(…)

秦がこの報告をすると折り返し、

「それでは、江名の弟子に上野為吉というものがいるはずだから、この者を探し出せ」と命令が下りました。そこで大阪難波に住んでいた為吉の父親のもとへ、出頭命令が飛び込んできました。父親はさっそく、東京にいる為吉へ至急帰阪するよう電報を打ったのです。(…)

大阪に戻った上野為吉は、この時21歳。そして明治27年3月に、陸軍第4師団の後援という看板で大阪島内に軍楽器製造工場を建てました。これが、正式には上野管楽器の始まりということになります。

上野が大阪で創業するまでの経緯は、詳細でかなりリアリティがある。また、上野管楽器は「陸軍第4師団の後援という看板で大阪島内に軍楽器製造工場を建てました」と明言していることから、完成品を納品する業者のようである。

問題は、この引用文では、明治二十六年（一八九三）の時点で江名が故人になっている点である。先に示した通り、江名は明治二十八年（一八九五）の第四回内国勸業博覧会に「コントルバース」などを出品し、褒状を受賞しているの、矛盾が生じてしまう。仮に、江名は亡くなったが、江名製作所の関係者たちが江名常三郎の名義で出品したのなら話は別だが、少し考えにくい。おそらく明治二十六年の時点で江名はまだ生きており、しかし、大阪砲兵工廠の秦金属課長からの要請に対しては、何らかの理由で辞退し、弟子の上野に譲ったのではないだろうか。

日清戦争がおわると上野管楽器も苦境に陥った。しかし、そんな中でも、明治三十六年（一九〇三）の第五回内国勸業博覧会（大阪）にはラッパを出品し、二度目のチャレンジで褒状を受賞する^{三〇}。

喇叭八出品八点ニシテ大阪府上野為吉ノ出品ラッパトス其他八云フニ

足ラス^{三一}

八点のうちの三点は上野のラッパで、「云フニ足ラス」と一蹴された五点ラッパのうち、三点は「心斎橋筋一丁目 佐々木峯造」^{三一}のラッパである。また、「東区鑓屋町 植村仙太郎」は「第七部 三十二類 武具類」に二点の「軍用喇叭」を出品し、褒状を受賞した^{三二}。

日露戦争が始まると、再び軍からの信号ラッパ注文が増加し、上野は大阪市南区河原町に工場を移転。さらにこの頃から兵隊を見送るブラスバンド、ちんどん屋が流行したことも重なり、コルネットやトランペットなどの注文が殺到し、盛り返したという。

上野為吉は昭和二十四年（一九四九）に亡くなり、長男の亀吉（明治三十二年生まれ）が上野管楽器を継いだ。亀吉が昭和三十五年（一九六〇）に亡くなった後は、亀吉の長男の都喜雄（昭和七年生まれ）が跡を継ぎ、昭和四十二年（一九六七）、トランペット奏者の二・ロツソが愛用したというトランペット「カンタービレ」を製作。都喜雄は二〇〇五年に亡くなり、一一年で上野管楽器は幕をおろした。

4. 江川仙太郎の江川楽器製作所、および日本管楽器

日本管楽器（ニツカン）の創始者ということもあり、江川仙太郎と江川楽器製作所についての言説の数は、これまでに取り上げた人物よりはるかに多い。だが、それぞれの情報が違っているところがあり、また生没年や出自など肝心な情報が不足している。かが浅草竜泉寺町を最初の拠点としていたことは、多くの記述に共通しているが、まずは錯綜している創業・創設の時期を中心に確認したい。

まず、創設を明治二十五年としたのは香河幾太郎で^{三三}、昭和三十五年の『楽器商報』に次のように書いている。

東京では明治25年に下谷竜泉寺で江川仙太郎氏が江川ラッパ製作所を創設してコルネットやラジオレット、信号ラッパなどの製造をはじめており、これは今日の日本管楽器株式会社の前身である。^{三六}

この執筆者の香河幾太郎とは、実は佐藤香津樹が『楽器商報』にエッセイを執筆するときのペンネームである。香河（佐藤）はこう書いたものの、これでは、明治二十五年にコルネットを作ったかのように読めてしまうことに気づいたのか、八年後に佐藤（香河）は次のように表現をかえた。

親の代からの銅壺職人で、管楽器の修理をしているうちに、この楽器を作ってみたくなり、いろいろ研究の末に、曲がりなりにもコルネットとトランペットを作り上げたという。これが、記録によると明治35年で（…）^{三七}

ここでは創業・創設の時期を明記せず（あえて曖昧にした？）、コルネットとトランペットを製造できるようになった年を明治三十五年と記したところが、その四年後、佐藤は明治二十七年説を唱える。

江川製作所は浅草竜泉寺にありまして、所長が江川仙太郎、工場長が柳沢徳太郎という人で、小さな町工場でございました。（注・江川製作所の創立は、日管史では明治27年ごろとなっています）^{三八}

これは、佐藤の連載「喇叭太平記」の第一回の叙述で、おそらく、初めて金管楽器製造史を述べるにあたり、「日管史」という資料にあたったところ^{三九}、創立は明治二十七年と判明したようだ。檜山『楽器業界』も、「管楽器工場「江川製作所」を作ったのが明治二十七年（一八九四）」^{四〇}と、言い、佐藤の見解に同調した。また、佐藤「喇叭太平記 第10回」では、江川が独立する前に陸軍工廠で働いていたことも紹介している^{四一}。書籍として広く流通した檜山の『楽器業界』によって、明治二十七年が定説となったように見えたが^{四二}、日本楽器製造株式会社——昭和四十五年（一九七〇）に日管を合併——の『社史』（一九七七）は、

明治二十五年（一八九二）、当時陸軍工廠に勤務していた江川仙太郎

は、独立して管楽器の修理を始めた。同三十五年（一九〇二）、東京・浅草竜泉寺町（現在の台東区）に、江川楽器製作所を設立し、コルネット、トランペット等国産管楽器の製作にのりだした。^{四三}

と、江川が独立した年を明治二十五年、江川楽器製作所の設立を明治三十五年とした。それぞれの根拠は示されていないが、独立と設立を分けたところに特徴がある。

こうして檜山の『楽器業界』の創立明治二十七年説と、日本楽器製造『社史』の独立明治二十五年・設立三十五年説（創設明治三十五年）が併存することになった。

その後、斎藤三郎（日本管楽器に昭和七年入社）は、江川は「小学校卒業後、板橋の陸軍兵器廠で信号ラッパの製作・修理の技術を習得」と、すでに江川が陸軍工廠でラッパ製造の技術を身につけていたと述べ（「生涯管楽器一轍」（一九八七）、「板橋の陸軍兵器廠」からの「独立」を明治二十五年、竜泉寺町に工場「設立」を明治二十七年とした（『足跡——ニッカン小史』（一九八九））。

この混乱は、そもそも基礎資料に乏しく、言い伝えの類も不正確であったことに加え、「独立」「設立」「創立」「創業」等の定義が人によって異なることから生じているようだ。

いずれにせよ、これらを総合して勘案するなら、陸軍工廠に勤務して（ラッパ製造に従事して）いた江川は、おそらく明治二十五年に独立し、二十七年に江川楽器製作所を創設。舶来楽器の修理を引き受けつつ、信号ラッパを製造し、同時に信号ラッパ以外の金管楽器の製造の研究を進めた。そして明治三十五年頃に、ようやくコルネットやトランペットを作ることができるようになった（この年を設立年とする文献もある）とするのが妥当なところだろう。

しかし、これらの文献には、江川が宮本勝之助の下で働いていたという事実が欠落している。ただし、そもそも宮本勝之助は陸軍の「造兵廠」の「ラッパ製作の主任の指導者から採用され」てラッパ製造の道に入ったので、宮本の下で江川が働いていたこと、陸軍工廠で働いていたこ

とは、同一とみなし得るかもしれない。

ところで、『ラッパ百年』は江川の独立について、次のようなエピソードを伝えている。

この江川という弟子は「陸軍」戸山学校へ行って、

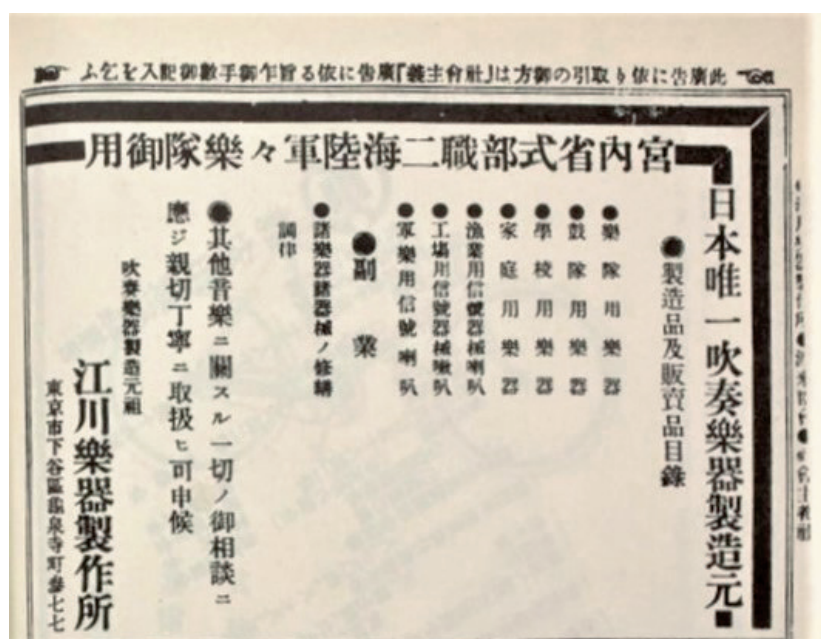
「私は、宮本ラッパをやめて、自分がラッパ屋を始めますから、私にご注文をいただきたい。私がいなくなった宮本は、できないと思うから、今後、自分宛に発注して欲しい」というような申し入れをした由である。

しかし、その当時は、官公庁でも義理人情が堅くて、

「お前がやめれば、それは宮本はできないかも知れない。しかし、今まで、当校は、宮本から買っていたのであるから、無断で宮本の発注をきみの方へ廻すわけにはいかない。宮本から承諾書をもたらって来るなら話は別である。宮本の承諾書があったら買ってやる」ということで、陸軍戸山学校の御用商人になったということである。^{四三}

宮本から独立するにあたって顧客を持っていく行為は、少々問題があるように思われるが、宮本警報機側がこのようなエピソードをわざわざ捏造しなければならない理由はないので、宮本家で語り継がれていた話なのだろう。ただ、この記述から、やはり江川を直接的に雇っていたのが宮本であったことがわかる。

ここまででは、主に佐藤香津樹（香河幾太郎）等の記事や『ラッパ百年』に基づいた江川楽器製作所の創業・創設の経緯である。



雑誌『社会主義』（一九〇四年八月）に掲載された広告

ところが、これらの文献がまったく参照していない『東京模範商工品録』（一九〇七）という資料が存在する。ここには、これまでの説明とは異なる江川の経歴が記されている。江川への取材（間接的な取材かも知れない）に基づいているはずなので信頼できそうだが、この種の「立志伝」は、往々にして話を盛り、時に美しく脚色し、かつ都合の悪い事実を隠蔽するのが通例なので、注意を要する。

江川仙太郎氏は幼児より非常に音楽の趣好を有し其六七才の頃木片又は竹等を以て各種の玩弄楽器を作りて之を楽みとなせり偶ま父と

共に横浜に到りしとき一外人の「クラリネット」を吹奏するあるを聞き神気を奪はれて傾聴甚だ久し斯くて帰宅するや自ら工夫を重ね小供心にも苦慮する数月漸くにして尺八に「キー」を附けたる一管を案出せり其工夫の巧妙なる人をして其天才に驚かしめしと云ふ^{四四}

江川の経歴について述べる多くの文献は、「親の代から銅壺屋」で、持ち込まれた楽器修理がきっかけで、ラッパ製造へと進んだというのが定型の語り口なのだが、『東京模範商工品録』は、江川が幼いころから音楽に強い関心を持ち、クラリネットに感銘をうけて、キー付き尺八という模造楽器をつくった「天才」だという。

君年十二歳自ら父に乞ひ浅草の某金属工場に年期修行に住込み大に金属の事に就て知識を得る処あり後此工場を辞するに及び或は海軍造兵廠又は陸軍砲兵工廠の下級職工となれり^{四五}

つまり、まず浅草の某金属工場（これが宮本喇叭製作所か）に入り、金属に関する基礎技術を習得してから軍の「下級職工」になった。

時恰も軍隊用の信号喇叭多数購入せられしを見るや大に悟る処あり自ら之を工廠に建議し其製作に当らんと期す然るに工廠は前きに技師をして試作をなさしめしと雖も結果不良のため中止せしことあるを以て容易に許さず茲に於て君独り慨然として工廠を辞す^{四六}

『東京模範商工品録』は、江川が「信号喇叭」製作を「建議」したが、すでに試作が「結果不良」であったことを理由に、却下されたという。しかし、明治四〇五年以降、陸軍工廠が「信号喇叭」を製造したことは確かなので、この部分は間違っている。だが、「信号喇叭」ではなく、まだ当時は製造されていなかった（コルネットのような）金管楽器製造を建議したとすれば、ありうる話かもしれない。

『東京模範商工品録』の江川は、陸軍工廠を辞めた後、自宅で管楽器の

製造に没頭するが、そう簡単には完成しないので、「終に家具家財は勿論妻子の什物迄之れを典し」「其の赤貧にして困苦の状実に惨憺たる能く名状すべきにあらず」という経済的苦境に陥る。仕方なく、江川は美容師が用いる香水吹器員の修理などで糊口をしのいだ。ある日、陸軍戸山学校から呼び出しの手紙が舞い込む。江川は「着るに衣なく踏むに履なし即ち印袷天の上へ廣口を着、草履の古きを穿て」、戸山学校を訪問して、将校と面会する。

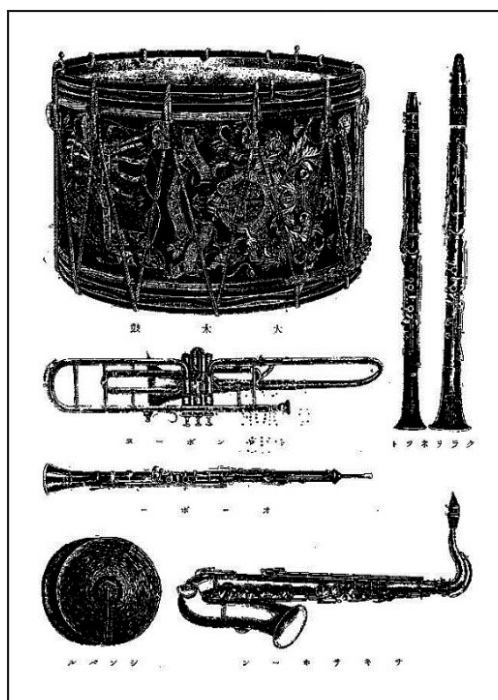
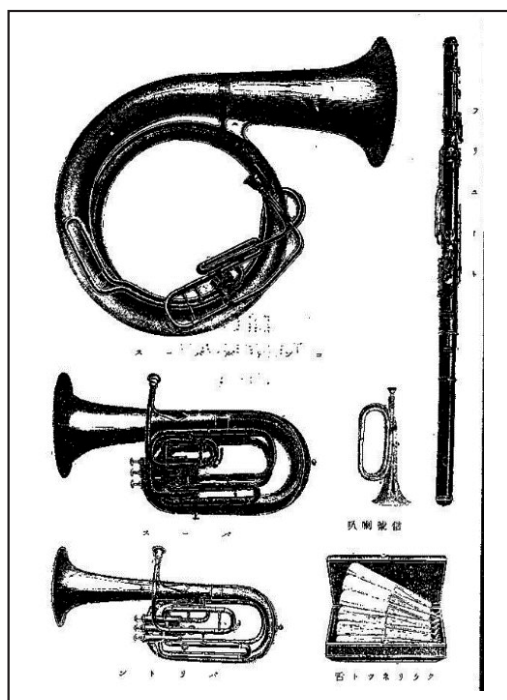
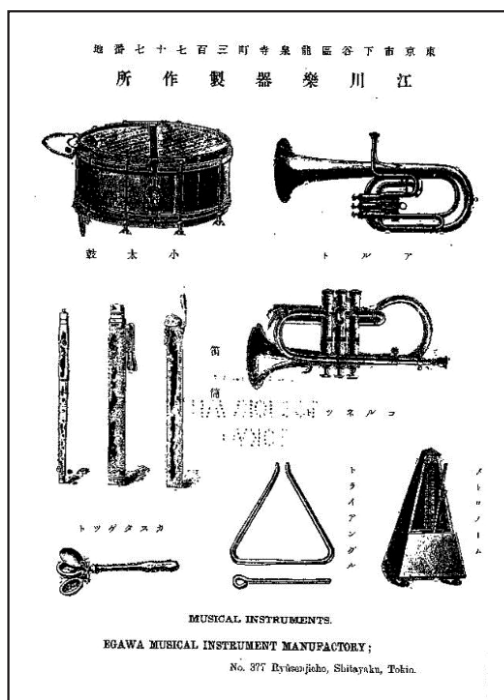
将校の曰く聴及ぶ汝吹奏楽器の製造に達すと果して然る乎汝然りせば楽器の製造及び修繕を命ぜんと欲す乍然規則あり今多数の事を授く宜しく身元保証三百金を提供せよと君答ふるに某技拙なりと雖製造又は修繕の事聊か修得し敢て外国品に劣らざるを自信す然れども赤裸々貧困の一職工今三百金の裕あれば今日如斯き短褐弊履の狂態を以て出頭せんや保証金壹円をも差出し難し又委するに重責の楽器を以て危険不信を思ひ給はゞ必しも之れを草屋に輸するに及ばず器具を携へ到りて之れを忽ち諸公の前に於てせん又或は自己の容姿を論拠とせば目下不可能に依り敢て自ら辞すと云ひ終りて蹶然退く^{四七}

交渉決裂のシーンは随分と芝居がかっている。フィクションのようにも見えるが、ここから判明するのは、この時点で江川は楽器の製造に成功しており、その噂を聞きつけ、陸軍戸山学校がアプローチしたことで、そして陸軍からの注文を請け負うには保証金が必要で、実際の製造作業は陸軍の中ではなく、江川の工場で行うことが前提であったこと等で、細部はそれなりに具体的で、真実であるような印象も受ける。

後日もう一度、陸軍戸山学校から書状が届き、江川はこれを無視したが、三回目の呼び出しには応え、ようやく楽器製造を任された。それが好評だったことから、宮内省式部職、近衛師団軍楽隊、海軍軍楽隊など、多くの団体からも注文を受けるようになった。

この成功物語に添えて、この時点（明治四十年）で製造されていた楽器の図——金管楽器は「コルネット」「アルト」「トロンボーン」「バリト

ン「ベース」「コントルベース」「信号喇叭」（図にはないが、本文中には、「テナー」「ビュウグル）、木管楽器は「クラリネット」「オーボエ」「サクソホーン」「フリュート」など、他に打楽器やメトロノームなどが掲げられている^{四八}。



『東京模範商工品録』の内容について、真偽は判別できないが、江川が存命中の同時代資料であり、無下に否定はできない。ひょっとすると『ラッパ百年』の記述が間違いかもれない。

つまり、まず宮本喇叭製作所で働いた江川は、宮本市五郎の没後に直ちに独立したのではなく、まず陸軍工廠に移り（そこには大阪からやってきた上野為吉もいた）、そこでコルネットなどの金管楽器の製造を建議したが不採用。そこで明治二十五～二十七年頃に独立をして、江川楽器製作所を設立、というストーリーも考えられる。

ところで『東京模範商工品録』が刊行された明治四十年は、上野で東京勸業博覧会が開催された年で、江川も出品している。檜山『楽器業界』は、

明治四十年（一九〇七）三月開催された東京勸業博覧会に試作品のヘリコンバス、小バス、バリトン、アルト、コルネット、トロンボーンなどの金管楽器を出品した。審査員（山田耕作^{五〇}）によれば、「息の通らぬものがあつた」という程度の出来であつた。^{四九}

といい、佐藤香津樹は、

ともかくにもヘリコンバス、小バス、バリトン、コルネット、トロンボーン等が出品（…）当時、この楽器を審査したのが、楽壇の大御所田辺尚雄氏で、「日本の管楽器は、まだ幼稚園の域を出ていない」と酷評したと言つ^{五〇}。

と、審査員の名前は異なるが^{五一}、どちらも低い評価を受けたという点は共通している。しかし、事実は違っており、江川（実際は共益商社の白井練一）が出品した「バス」は三等を、「アルト」「バリトン」「小太鼓」「ヘリコン」「バス」は褒状を受けている。

『東京勸業博覧会審査報告』（巻一）では、

吹奏楽使用ノ金属楽器ハ製作上最困難ナル所「ピストン」ニ在リト

謂フ白井練一出品江川仙太郎製作ノ品ハ苦心ヲ積ミテ右ノ困難ヲ排除シタル結果ナリ而シテ江川仙太郎八世上ノ需要少キニモ拘ラス製作ニ苦心シテ各種ノ楽器製出ニ熱心スト云フ是ニ賞スヘキナリ今後益々精励セハ其ノ製作、販路共ニ大ニ発展スルモノアラム^{五一}

と、それなりに評価されているのである。

明治四十一年の秋、不況によりやむを得ず田端に工場を移したが、明治四十三年頃には、

ヘリコンバス、小バス、バリトン、アルト、コルネットなど、けっこう専門家が使用できるほどの、りっぱな楽器ができあがりました。ことに映画館の楽士たちのあいだで評判がよく、商売も順調になり^{五三}

その結果、大正元年に再び工場を浅草竜泉寺に戻すことができた。

明治期の江川楽器製作所の主要メンバーには、工場長の柳澤徳太郎（一八七二～一九四五）^{五四}、機械部長の新谷丑之丞（江川の一弟子）、江川巳之吉^{五五}、杉村政吉（江川の二女と結婚）、西村長太郎（明治二十七年生まれ）^{五六}、関口松吉、大野嘉津一（明治三十七年入社）^{五七}、三之宮春吉（明治三十七年入社、江川の長女ちようと結婚）^{五八}、石森善吉（明治三十八年入社）などが在籍しており^{五九}、『東京模範商工品録』では、柳澤、関口に加えて「技術者 梶村吉之助氏」「木工部長 吉田氏」「塗工部主任 田代重太郎」「鍛工部長 鈴木庄蔵氏」「革具部主任 玉木勇次郎」の名前も挙げている。

これらのうち、江川楽器製作所から独立した者（柳澤は明治四十二年に柳澤管楽器を^{六〇}、石森は戦後に石森管楽器修理所を設立）、他社へ移籍した者（江川巳之助は田邊楽器に、杉村は田邊楽器から内生管楽器に、西村は田邊楽器からラグラ楽器に）も多く、東京における管楽器製造の技術伝播の起点となった。

江川楽器製作所の経営は、明治末から大正期に軌道に乗ったようだが、突然ここで江川が退場する。

三戸知章は次のように言っている。

当時、江川さんの息子「江川伊平」さんが楽隊をやっていましたが、江川さん自身、かねがね興行師になりたいという願望をもっていたので、結局苦労が多くて儲からないラッパ造りのような仕事はやめてしまいました。^{六二}

八代逸蔵も同じようなことを述べている。

かねて興味をもっていた興行師となり、玉乗り、手妻（今の手品）などの一座を組織して地方巡業などして晩年を世田ヶ谷で送ったという。息子も父と同じ興行師の道を歩み（…）^{六二}

江川楽器製作所があつた浅草において、興行界の「江川」といえば、明治初期から大正期まで浅草六区で興行をしていた玉乗りの江川作蔵一座を思い起こすのだが、作蔵と仙太郎に何か関係があつたのかは分からない。ただ、映画やサーカスの楽隊の楽器修理を請け負うこと、また、柳澤徳太郎が松旭斎天一、天勝の奇術の道具を作っていたこともあり、江川楽器製作所にとって浅草の興行界は近い存在であつた。だが、管楽器の製造に心血を注ぎ、苦心の末に立派な楽器を製造できるようになつた江川が、急に興行界に身を転じるのは意外である。

佐藤香津樹は次のように説明しており、こちらが真相と思われる。

江川の独断的な経営に不安を感じていた周囲の人たちのすすめで、ここに新潟県出身の中山隆次氏が登場することとなった。^{六三}

佐藤が言う「江川の独断的な経営」について、江川の娘婿であつた三之宮春吉が、後年に具体的な証言を残している。

大正期、三之宮は営業先の陸軍戸山学校で、管楽器製造に興味をもつ高見という人物と知り合いになった。



『世界之日本』（一九二一）に掲載された日管松山工場

管楽器の製作は先き行けば見込みのある事業だと思はれるから、私「高見」が戸山学校をやめたら会社組織にしてやらうじゃないか。是非さうして貰いたい。といふ。私「三之宮」もその時ハツキリ言つた。私も実に苦んでゐる。この仕事はまともにやつて行けば見込みのある仕事と思ふ。しかし、あなた「高見」も知つてゐるやうに、うちの親爺「江川」はあんなふうだ、全然仕事のことは構はない、註文の金がいると、それをどつかへ持つて行つて使つてしまふ。仕事のやりくりもしないで実に私は苦んでゐると。^{六四}

この後、高見は別の事業に参加することになったため、陸軍戸山学校を退役した中山隆次^{六五}が高見に代わつて、三之宮とともに江川楽器製作所を会社組織にすべく動いた。中山隆次は郷里の新潟の大財閥、伊藤成治（一八八三？～一九三九）から融資を受けることに成功し、大正七年（一九一八）、合資会社日本管楽器製作所が誕生した。社長は伊藤成治。出資をした社員のなかに日本楽器製造の東京支店長、福島鋭雄^{六六}の名前も見える。工場は浅草竜泉寺町から松山町に移転した。

それでも江川仙太郎は相変わらずで、

案の條、親爺はちつとも構はない。私と中山さんでやつてゐた。金がある時になると、中山さんを搾つて金を持つて行つた。それで中山さんは考へて、何んとか親爺を排斥しなければならぬ。^{六七}

つまり、創業者の江川は、好んで興行師になつたのではなく、追い出されたのである。^{六八}

この後、合資会社日本管楽器製作所は、昭和十二年（一九三七）に日本管楽器株式会社となり、監査役として日本楽器製造の川上嘉市を迎え、昭和四十五年（一九七〇）には日本楽器製造（現在のヤマハ）と合併する。ちなみに、大正十一年の平和記念東京博覧会では、管楽器を出品した日本楽器製造が、「コルネット」「アルト」八優良ナレド他八音程音色トモ前者二比シ稍々劣ルノ感アリ」と評されたのに対し^{六九}、日本管楽器製作所は、

日本管楽器製作所ノ出品セル「コルネット」ノ如キ外国品ニ比シテ殆ンド遜色ナキ優品ヲ得タルハ最モ喜ブベキコトナリ。概シテ日本管楽器製作所ノ出品ハ良好ナリ^{七〇}。

と、絶賛されており、この時点での両社のあいだにあった技術力の差を見ることができる。

5. 田邊鐘太郎と田邊楽器

明治三十年（一八九七）八月二十四日、『朝日新聞』に次の記事が掲載されている。

軍楽器製作所の創立

佐藤龍太郎田中多吉八代泰作益田金蔵ノ四氏ハ芝三田四国町に同器製作所を設置せり輸入品ハ一切洋銀なるを以て種々の欠点あれども

同所に於てハ純銀製を以て製作するにより洋銀製よりも音調能く随て鑄を生ずるの患なく且本邦に於ける賃銀安きため輸入品の三分の二位にて製作することを得と又是迄本邦へ輸入せざる最新器独逸より取寄せ縦覧せしむる由

佐藤香津樹によると、所長の佐藤龍太郎と技師長（元銅壺屋）の松田源次郎（金三）によつて芝三田の薩摩原に軍楽器製作所が設立された^{七一}。五十嵐喜広『濃飛育児院』（救済新報社 一九〇二）に掲載されている軍楽器製作所販売部の広告からは、すでに宮内省、海軍省、陸軍省と取引をしていたこと、「独逸」ではなくフランスのベッソン社（パリ）の楽器の特約販売をおこなっていたことが判明する。

●軍楽器製造販賣廣告

本邦は多年宮内省、海軍省、陸軍省、御用ノ樂ヲ樂シ軍樂器ニ關スル一切ノ品及附屬品製造並ニ直接輸入販賣政シ居リ保今回事案擴張致シ増々敏速販賣ヲ旨トシ江湖諸君ノ購求ニ應ジ皮候賜顧御愛顧ノ極ヲ願フ上儀

佛國パリ府
ベッソン會社軍樂器特約販賣、

東京市芝區三田
四國町二番地
東京軍樂器製造販賣部

しかし、日露戦争後に需要が落ち込み、とたんに経営が苦しくなった。麻布六本木で薪炭商として財を成していた田邊鐘太郎（一八六六〜一九四二）は、取引先の宮内省雅樂部に出入りしていたときに、やはり出入り業者の佐藤・松田と知り合い、軍楽器製作所の支援を求められた。田邊は日露戦争の頃は民間プラスバンドの六本木音楽隊を組織し、麻布連隊の行進にに合わせて演奏したくらい音楽好きだったことから、楽器製造にも関心を示し、明治四十年頃に経営を引き受けることになった。前述のとおり、ここに江川楽器製作所の江川巳之助、杉村政吉、西村長太郎が合流する。大正初期に麻布六本木に工場を移転した際に、田邊楽器製作所と改称した。木管楽器の製造にも力を入れ、日本で初めてクラリネット、サキソフォンを製造したのは田邊鐘太郎と言われている^{七二}。

『東京大正博覧会出品審査概況 附・受賞人名簿』(一九一四)には、「銅牌」に、

クラリネット 東京市麻布区六本木町 田邊鐘太郎
 コルネット 同 人七三

また、ホルンも「褒状」を獲得した^{七四}。

その後の田邊楽器製作所は、昭和期に規模を拡大し、日本管楽器と業界を二分した時期もあったが、第二次世界大戦後に復興に失敗し、様々な試みが企てられたものの、日本楽器製造の支援を受けた日本管楽器とは対照的に、消滅する。

6. おわりに

国内における洋楽器製造というと、オルガン、ピアノ、ヴァイオリンに注目が集まりがちだが、西川寅吉や山葉寅楠、鈴木政吉と同じ時代に並行して管楽器製造も進展していた。本稿では、主に大阪の江名常三郎、上野為吉、東京の宮本勝之助、江川仙太郎、田邊鐘太郎という五人の楽器製作者について、佐藤香津樹をはじめとする諸文献を批判的に用い、同時に内国勧業博覧会等の記録などで裏付け、それぞれの履歴を整理した。おおよその輪郭を示すのみで、明確な結論を出すことができない部分もあるが、それらは今後の研究に委ねたい。

取り上げた五人のなかでは、現在のヤマハ株式会社の管楽器セクションの源流となる江川仙太郎が最重要人物であることに異論はない。だが、かれが単独で楽器を作っていたのではなく、東京の宮本、大阪の江名や上野、あるいは陸軍工廠などとの関係性のなかで描写されるべきであろう。また、すべてを網羅できないが、臼倉清吉(誠吉)や植村仙太郎のように広告や博覧会記録のみに名前を残し、その後、完全に忘れられた製造業者がそれなりに存在したこと(銅壺屋の技術があれば簡単に起業できたが、不況によって簡単に消えてしまつ)、渡り職人が工場を移動していたこと(製造技術の伝播という観点から興味深い)からも、当時の

楽器製造業の様子を窺うことができる。

とりわけ江川や田邊については、本稿に記した事項以外にも、さまざまな業績やエピソードが多々あるが、紙幅の都合で、すべてを紹介することはできていない。関心のある向きは、たとえば佐藤香津樹の「喇叭太平記」等を参照されたい。

※本研究は文部科学省科学研究費、基盤研究(C)「明治前期の日本の信号ラッパ——英仏の影響と西南戦争における運用の実態について」(2000158)の成果の一部です。

参考文献

- 五十嵐喜広「濃飛育兒院」(救済新報社 一九〇一)
上野亀吉「大阪江名管楽器のこと」『楽器商報』一九六〇年三月、四十三頁。
奥中康人「明治初期の金管楽器製造について」国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵文書の分析を中心に「静岡文化芸術大学研究紀要」第二十卷(二〇一九)五十一〜七十二頁。
香河幾太郎(佐藤香津樹)「ラッパ盛衰記」『楽器商報』一九五六年六月、八十四〜八十五頁。
香河幾太郎(佐藤香津樹)「ラッパ盛衰記 日本管楽器の歴史」(日本管楽器の歴史)『楽器商報』一九五六年七月、十八〜二十頁。
香河幾太郎(佐藤香津樹)「管楽器製造業界雑感」『楽器商報』一九六〇年四月、二十二〜二十三頁。
川上嘉市「洋楽器製造の沿革」明治大正史 第八卷 産業篇(一九二九)三四八〜三五六頁。
斎藤三郎「生涯管楽器」(4)『ミュージックトレード』一九八七年八月、八十二〜八十四頁。
斎藤三郎「足跡——ニッカン小史」(私家版 一九八九)
佐藤香津樹(統)「江名管楽器のこと 杉本武三郎氏に聞く」『楽器商報』一九六〇年四月、二十四頁。
佐藤香津樹「ラッパづくりの黎明期 日本管楽器製造業界小史」『ミュージックトレード』一九六八年五月、二十七〜三十頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第一回 日管のむかし語り」『ミュージックトレード』一九七二年二月、六十四〜六十五頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第二回 日本管楽器の無念」『ミュージックトレード』一九七二年三月、五十二〜五十三頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第三回 奇人 柳澤徳太郎伝(一)」『ミュージックトレード』一九七二年四月、七十六〜七十七頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第四回 奇人 柳澤徳太郎伝(二)」『ミュージックトレード』一九七二年五月、二〇〜二二頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第七回 田辺管楽器(一)」『ミュージックトレード』一九七二年八月、一三八〜一九九頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第八回 田辺管楽器(二)」『ミュージックトレード』一九七二年九月、一三四〜一三五頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第九回 田辺管楽器(三)」『ミュージックトレード』一九七二年十月、一三〇〜一三一頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第十回 上野管楽器(一)」『ミュージックトレード』一九七二年十一月、一四〇〜一四二頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第十一回 上野管楽器(二)」『ミュージックトレード』一九七二年十二月、一四〇〜一四二頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第十二回 大野嘉都一の生涯」『ミュージックマガジン』一九七三年一月、一五八〜一五九頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第十三回 三ノ宮春吉の生涯」『ミュージックトレード』一九七三年二月、一二八〜一二九頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第十七回 幻の管楽器「星鑑印」」『ミュージックトレード』一九七三年六月、一六〇〜一六一頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第二十一回 瀬戸口藤吉の巻(三)」『ミュージックトレード』一九七三年十月、二〇〜二二頁。

- 佐藤香津樹「喇叭太平記 第三十二回 日本管楽器の巻」『ミュージックトレード』一九七四年十一月、一二三〜一二四頁。
佐藤香津樹「喇叭太平記 第三十八回 田辺楽器の思い出」『ミュージックトレード』一九七六年二月、二六〜二七頁。
相沢捨松・大村兼次・田辺次郎・小椋正二・大江俊介「管楽器の思い出」『楽器商報』一九五六年十二月、十五〜二十一頁。
田辺勝三・三ノ宮春吉・三ノ知章・目黒三策「管楽器創始秘話(座談会)」『吹奏楽』(二)十一、三二六〜四十五頁。
東京日日通信社「現代音楽大観」(日本名鑑協会 一九二九)
中山安太郎編「東京模範商工品録」(東京模範商工品録編纂所 一九〇七)
名倉欣三「私の歩いてきた道」『ミュージックトレード』一九八四年七月、八十四〜八十七頁。
日本楽器製造株式会社「社史」一九七七年。
檜山陸郎「楽器業界」(教育社新書 一九七七)
檜山陸郎「楽器産業」(音楽之友社 一九九〇)
三ノ知章・田辺勝三・八代逸蔵・大村兼次・小椋正二「日本のラッパものがたり 座談会 非常時の連続で着々と基礎をきく」『楽器商報』一九六八年十月、三十七〜四十一頁。
宮越信一郎「宮本富三郎「軍国日本人物大鑑」(議会政治社 一九三八) 四九八頁。
宮本庫治「ラッパ百年」(私家版 一九六九)
八代逸蔵「日本管楽器70年の歩み」『ミュージックトレード』一九七〇年四月、四十七〜四十七頁。
横山錦柵編「東京商人録」(大日本商人録社 一八八〇)

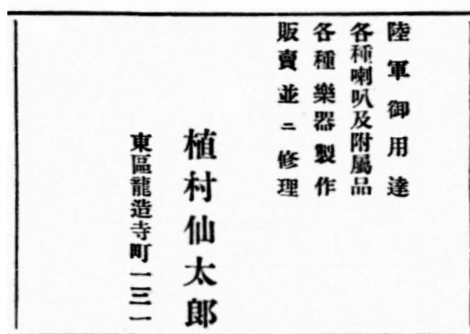
博覧会資料(年代順)

- 『明治十年内国勸業博覧会出品目録』(4) (内国勸業博覧会事務局 一八七七)
『明治十年内国勸業博覧会審査評語』(一) (内国勸業博覧会事務局 一八七七)
『第三回内国勸業博覧会出品目録』(内国勸業博覧会事務局 一八九〇) 『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料 147』(明治文獻資料刊行会 一九七四)
『第三回内国勸業博覧会受賞者人名録』(両友社 一八九〇)
『第三回内国勸業博覧会受賞授与人名録』(内国勸業博覧会事務局 一八九〇)
『第三回内国勸業博覧会事務報告書』(大阪府内務部 一八九二) 『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料 147』(明治文獻資料刊行会 一九七五)
『第四回内国勸業博覧会出品部類目録』(第四回内国勸業博覧会事務局 一八九四)
『第四回内国勸業博覧会報告書』(大阪府内務部 一八九六)
『第四回内国勸業博覧会審査報告』(第四回内国勸業博覧会事務局 一八九六)
『第五回内国勸業博覧会受賞名鑑』(一九〇三)
『第五回内国勸業博覧会審査報告 第七部』(長谷川正直 一九〇四)
『第五回内国勸業博覧会審査報告 第九部』(長谷川正直 一九〇四)
『東京勸業博覧会審査報告 卷二』(東京府 一九〇八)

- 一 奥中「明治初期の金管楽器製造について」
二 檜山「楽器業界」七十四頁。
三 宮本「ラッパ百年」二十一〜二十二頁。
四 「明治十年内国勸業博覧会出品目録」(4) (一八七七)。ただし、『明治十年内国勸業博覧会審査評語』(一) (一八七七) に宮本勝之助の名前はない。

- 五 モース（石川欣一訳）『日本その田の田』（平凡社 一九七〇）二二四頁（Edward Sylvester Morse, *Japan day by day*, 1917, p.254）。
- 六 横山編『東京商人録』（一八八〇）。
- 七 宮本『ラッパ百年』二二七頁。
- 八 奥中「明治初期の金管楽器製造について」六十八頁。
- 九 佐藤香津樹（一九〇七〜一九七八）『音楽世界』、『音楽新聞』、田邊楽器の『バンドの友』、『楽器商報』の編集を経て、『ミュージックトレッド』にも参画。
 - 慶応元年生まれの永井建子は、この当時（明治十年代）まだ十代なので、江名を引き立てることができたか疑問。杉本が、永井岩井楽長と混同したのかもしれない。
- 二 佐藤（統）江名管楽器のこと 杉本武三郎氏に聞く二二四頁。
- 三 香河（佐藤）は「管楽器製造業界雑感」では、「江名第三郎氏による江名製作所が、明治八年大阪に管楽器製作所を創設した」と書いたが、佐藤「喇叭太平記 第10回」では、「おそく明治十年代」とした。
- 三 廃藩置県前の和歌山でラッパが製造されていたが、和歌山出身の江名がこれに関係していたかはわからない。
- 四 佐藤（統）江名管楽器のこと 杉本武三郎氏に聞く二二四頁。
- 五 上野「大阪江名管楽器のこと」四十三頁。
- 六 「第三回内国勸業博覧会褒賞授与人名録」七十四頁。
- 七 「第三回内国勸業博覧会褒賞授与人名録」五十九頁。
- 八 明治二十六年四月、白倉は陸軍にラッパの「上納願」を出したが、「陸軍品用ノ喇叭ハ砲兵工廠ニテ製作被候ニ付他ヨリ買収ノ必要之無」と、却下された（喇叭上納ノ件）アジア歴史資料センター 030379100）。
- 九 「第三回内国勸業博覧会審査報告」（第一部）八四八〜八四九頁。
- 一〇 「第四回内国勸業博覧会出品部類目録」（第一部 工業上）四〇五頁。
- 二 杉本は「明治二十年頃からすでに江名製作所ではバリトン、バルブトロンボン、ホルネット、ビッグル（ホルネットの代用）アルト、大バス、小バス、ソプラノ（クラリネットの前身）メタルクラリネットなどを作っていました」（佐藤「江名管楽器のこと 杉本武三郎氏に聞く」二二四頁）というが、「明治二十年頃」を裏付ける資料が見当たらない。
- 三 「第四回内国勸業博覧会報告書」七十八頁。
- 三 「弊店製造ノ喇叭ハ多年ノ熟練ト非常ノ勉強トヲ以テ精巧耐久而モ廉価ノ高評ヲ博シ日繁昌ノ栄ヲ蒙リ特ニ昨年大義ノ大施ヲ植ヲ迷清瀟瀟ノ出師以来日夜ノ劇務ト繁忙ハ江湖愛顧ノ諸君ニ向テ自然御疎遠勝チナリシ段軍国多事ノ際トテ御諒察被下度候今や連捷ノ光譽ト共ニ東洋ノ平和ヲ克復スルコトヲ得大日本帝國ノ地位ハ一大転進ト共ニ精神的ニ物質的ニ総テノ転進ヲ促シ就中軍備拡張軍事的教育ノ普及ハ刻下ノ一大急務トナリ並ニ地方消防組ノ改良ハ大ニ喇叭ノ需用ヲ増加シタルヲ以テ此際大ニ事業ヲ拡張シ熟練ノ職工ヲ増備シ増ノ注意ト改良ヲ施シ左ノ実費額ヲ以テ江湖ニ配チ弊店特色ノ精巧ト廉価ヲ證セントス是偏ニ平素ノ寵眷ニ報シルノ赤誠ニ外ナラザルナリ願クハ弊店ノ微衷ヲ嘉納セラレ続テ御用仰付ケラレコトヲ希フ
- 陸海軍用 消防用 学校用 運動會用 遊戲用
- 甲価 三三三三三三 乙価 二四四四四四 丙価 一四四四四四 丁価 一四四四四四 戊価 一四四四四四
- 己価 七十七七 庚価 五十五五 辛価 三十三三 壬価 二二二二 癸価 一一一一
- 一四 「音楽雑誌」第五十四号（一八九五年十月三十一日）十九頁。
- 一五 「第四回内国勸業博覧会出品部類目録」（第一部 工業上）四〇五頁。
- 一六 「第四回内国勸業博覧会審査報告」（第一部 工業上）四〇五頁。
- 一七 佐藤「喇叭太平記 第10回」および「喇叭太平記 第11回」
- 一八 上野龜吉は、父為吉の生年を「明治七年」と言うが、佐藤は明治八年生まれの杉本武三郎が言う「上野さんは私より二つ年上」を採用したようだ。

- 二九 佐藤「喇叭太平記 第10回」一四〇頁。
- 三〇 佐藤「喇叭太平記 第10回」一四〇〜一四一頁。
- 三一 「第五回内国勸業博覧会受賞名鑑」四二二頁。
- 三二 「第五回内国勸業博覧会審査報告 第九部」二〇五頁。
- 三三 佐々木肇造は「大阪商工名鑑」の大正二年版には「日用品金物類」、同書大正七年版には「鉄瓶、銅瓶、洗面器、バケツ、其他各種金物類」の業者として記載されている。
- 三四 植村仙太郎の軍用喇叭は、「第七部 三十二類 武具類」に出品。「軍用喇叭ハ多年軍用喇叭製作シ来リタル大阪府植村仙太郎ノ出品ニテ殊ニ今回ノ出品ハ製作良好ニシテ吹奏簡易ナリ確ニ擬賞ニ値スルモノト認メタリ」（第五回内国勸業博覧会審査報告 第七部）六十一頁と評価された。また、植村は「帝國商用信用録」（博信社 一九二三、一五六頁）に広告をだしている（左図）。履歴は不明だが、大阪が拠点なので、江名が上野のもとで働いた職工の可能性はある。



- 三五 川上嘉市は「日本に於ける管楽器製造に関しては、明確な記録なく、従つてその年代も詳らかでない。併し最初に製作せられたものは、信号喇叭で、明治二十四五年頃と推測せられたる。」と述べている（川上「洋楽器製造の沿革」三五五頁）。
- 三六 香河「管楽器製造業界雑感」二二二頁。
- 三七 佐藤「ラッパづくりの黎明期」二二七頁。
- 三八 佐藤「喇叭太平記 第10回」一六四頁。
- 三九 三之宮春吉は「江川楽器製作所の歴史を書いた相当立派な本ができたのです。いまその本を捜してあるのだけれどもどこを捜しても見当たりません」（田辺・三之宮・三戸・目黒「管楽器創始秘話（座談会）」三八八頁）と言っており、この「立派な本」が、佐藤の言う「日管史」かもしれない。
- 四〇 佐藤「喇叭太平記 第10回」一四〇頁。日管の大村兼次は、「江川さんが砲兵工廠の職長をしておつて、その傍ら、その時分に信号ラッパを作り初めたんです」と発言しているが（祖浜・大村・田辺・小椋・大江「管楽器の思い出」十七頁）、江川が「職長」であったことについては確認が取れない。
- 四一 他に明治二十七年説をとる文献は、名倉「私の歩いてきた道」。

- 四二 日本楽器製造『社史』二二六頁。
- 四三 宮本「ラッパ百年」二七二―二八頁。
- 四四 中山「東京模範商工品録」七三頁。
- 四五 中山「東京模範商工品録」七三頁。
- 四六 中山「東京模範商工品録」七三頁。
- 四七 中山「東京模範商工品録」七三頁。
- 四八 日管がこの時点で本格的なフルートやオーボエを製作できたのかは疑わしく、輸入楽器か、外注した簡易楽器と思われる。
- 四九 檜山「楽器業界」七十四頁。
- 五〇 佐藤「ラッパづくりの黎明期」二十八頁。
- 五一 主任審査官は大島義脩と村岡範爲。審査嘱託は、上原六四郎、鳥居悦、富尾木知佳、楠美恩三郎、多忠基。山田耕作や田辺尚雄の名前はない。
- 五二 「東京勸業博覧会審査報告」一一〇―一一頁。
- 五三 佐藤「喇叭太平記 第1回」六十五頁。
- 五四 佐藤「喇叭太平記 第3回」「喇叭太平記 第4回」。
- 五五 同じ江川姓なので親類の可能性もあるが、三之宮春吉は、「千住の巳之ちゃん」は江川仙太郎の友達だったと言っている(田辺・三之宮・三戸・目黒「管楽器創始秘話」(座談会)四十頁。
- 五六 佐藤「喇叭太平記 第17回」を参照。
- 五七 佐藤「喇叭太平記 第12回 大野嘉都一の生涯」を参照。
- 五八 佐藤「喇叭太平記 第13回 三ノ宮春吉の生涯」を参照。
- 五九 「管楽器の父 石森善吉氏逝く」『ミュージックトレード』(一九六九年六月)一一三頁。
- 六〇 佐藤は柳澤管楽器の設立を明治四十二年とするが、現在の柳澤管楽器の公式ホームページは「創立明治27年」、檜山「楽器業界」は、明治二十九年発足としている。
- 六一 三戸・田辺・八代・大村・小椋「日本のラッパものがたり」三十八頁。
- 六二 八代「日本管楽器70年の歩み」四十一頁。
- 六三 佐藤「ラッパづくりの黎明期」二十八頁。
- 六四 田辺・三之宮・三戸・目黒「管楽器創始秘話」(座談会)四十三頁。
- 六五 中山隆次(一八八三―一九三二)、新潟県出身、明治三十四年に陸軍戸山学校軍楽隊に入り、本管楽器を担当。卒業後、陸軍軍楽隊、「官報」によると一九一七年に「等楽手」『現代音楽大観』(一九九頁)では、一九一六年に軍楽隊を引退した後、楽器製造に従事した時期があり、その後に「伊」(江)川楽器製作所を買収したことになる。
- 六六 大正七年「合資会社日本管楽器製造所定款」より。福島鋭雄は福島豊策(山葉寅楠を援助した医師)の養子。福島の出資額は七千円で、伊藤家の三人、文吉(一万三千円)、成治(一万八千五百円)、九郎太(七千五百円)に次いで多い。
- 六七 田辺・三之宮・三戸・目黒「管楽器創始秘話」(座談会)四十三頁。
- 六八 佐藤「ラッパづくりの黎明期」は、江川の没年を記事前半では「昭和2年」、後半では「昭和15年」と言っている。また、日管が成立するまでのプロセスは、「官報」では少し異なり、大正七年に合資会社江川楽器製作所が設立、大正十年に合資会社日本管楽器製造所に商号を変更、大正十三年に江川仙太郎が退社している。
- 六九 この日管の管楽器製造には若き日の大橋樺岩がかかわっていた。大橋ピアノ研究所「人技あればこそ、技人ありこそ 父子二代のピアノ」(創英社二〇〇〇)四十五頁、一七八―一七九頁。
- 七〇 平和記念東京博覧会審査報告 上巻 四十頁。
- 七一 佐藤「喇叭太平記 第7回 田辺管楽器」(一) 六十七頁。

- 七二 田邊管楽器については、佐藤「喇叭太平記 第7回 田辺管楽器」(一)、「喇叭太平記 第8回 田辺管楽器」(二)、「佐藤「喇叭太平記 第9回 田辺管楽器」(三)」を参照。ただしこれらの文献ではクラリネットが初めて製造された年を一九一六年としているが、田邊がクラリネットを出品した東京大正博覧会は一九一四年に開催されている。
- 七三 また、藤浦汎「瀬戸口藤吉」(新興音楽出版社一九四二)によると、瀬戸口藤吉は、明治四十四年に渡欧する際、横須賀工廠の工員「松田金蔵」を連れて行き、フランスで松田に金管楽器製造を学ばせ、帰国後、田邊管楽器で金管楽器を製造させる計画を立てた。松田は二年間「ベッソンの工場」で働いて帰ってきたが、日本に帰った松田は楽器を作らず、計画は失敗に終わった(益田金蔵、松田金三と似ているが同一人物かどうかは不明)。佐藤「喇叭太平記 第21回」では、現地で楽器製造を学んだのは「佐藤某」になっている。
- 七四 「東京大正博覧会出品審査概況 附・受賞人名簿」一一三頁。
- 七五 「東京大正博覧会出品審査概況 附・受賞人名簿」二八三頁。

Brass instrument manufacturers in Meiji Japan: Analysis of magazine articles and National Industrial Exhibitions records

OKUNAKA Yasuto

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

The history of Western musical instrument manufacturing in Meiji Japan tends to be biased toward organs, pianos, and violins, and not much research has been done on brass instrument manufacturing. There is many inaccurate information even on EGAWA Sentaro, who is the most famous of all. The purpose of this paper is to organize information on craftsmen who manufactured brass instruments during the Meiji period, based on articles in the magazines "Music Trade", "Musical Instrument Business Journal" and records of National Industrial Exhibitions.

Representative brass instrument makers as pioneers were ENA Tsunesaburo and UENO Tamekichi in Osaka, and MIYAMONTO Katsusaburo, EGAWA Sentaro, and TANABE Kanetaro in Tokyo.

Many of them began by repairing instruments and making military bugles, and eventually went on to make brass instruments such as cornet and baritone.